

第5節 【教材4-5】愛と自由のために— 高橋くら子との出会い

【教材4-5】「愛と自由のために」を学習するにあたって

中学校の同和教育では、水平社運動の概要を学習します。しかし、運動に関わった人々の生き方にまで深めた学習をしてきている生徒は多くありません。

高橋くら子は部落解放と女性解放の先駆者であり、現在の長野県小諸市の出身です。教材の「高橋くら子との出会い」は中学3年生のあき子さんが、高校生活に抱く夢と不安の中で、高橋くら子の生きかたに出会うという筋ですが、この文章をきっかけにして、生徒に調べさせたり、考えさせたりしたいことが三つあります。

一つは、くら子の学校生活や水平社運動との関わりのエピソードを通して、同和教育のなかったその時代の部落差別の状況に触れ、それに対して立ち上がった水平社の運動の意義を考えさせることです。

二つ目には、偏見や差別が日常的であった屈辱の中で、それに耐えて自己を磨き、水平社運動との出会いによって、その持てる資質を開花させたくら子の生き方に触れ、生徒自身の生き方を振り返らせることです。

三つ目は、水平社の理念がくら子に新しい人生の価値観を与え、はなばなしい活躍をもたらしたことを理解させ、自分たちはどのような価値観に基づいて生きているかを探らせることです。また、解放子ども会に学んできた「あき子」が、高校での生活に抱いている不安や期待について考えてみることもいいでしょう。

準備

- ・「解放子ども会」「水平社」「高橋くら子」などについての生徒の知識を、アンケート等であらかじめ調査しておきます。
- ・水平社の活動期の時代背景がわかるような年表を掲示します。

展開

- ① 教材「愛と自由のために高橋くら子との出会い」を読む。
- ② 差別に耐え、女学校を優秀な成績で卒業したくら子の生き方について考え、自分たちの高校生活を振り返る。
- ③ [参考]「水平社の思想とくら子」「年表」をもとに、「西光万吉」「米騒動と水平社運動」「水平社宣言」などのテーマで調査活動を行い、発表する。(巻末資料も参照のこと)
- ④ 教材「高橋くら子との出会い」のあき子の心配を、自分たちの高校にあてはめて考える。

【教材4-5】愛と自由のために—高橋くら子との出会い

— 中学3年生のあき子さんの場合 —

中学3年生の文化祭が終わると、クラスの中の話は自然と高校進学のことが多くなりました。あき子さんも人前では言いませんが、既に希望する高校が決まっていました。家での勉強にも力が入ります。でもあき子さんには、高校へ入ってからのことで、一つ心配なことがありました。

あき子さんは小学校の1年生の時から9年間、解放子ども会に通ってきました。そこでの一番の目標は、部落差別に負けない力をつけることです。「自分がいつか差別を受けるかもしれない」という不安を持つこともありました。解放子ども会の仲間たちや解放運動に取り組む大人の人たちの力強い支えがありました。学校にも理解してくれる友達がいまし、先生方の応援もあります。「でも高校に入ったら、いっしょに部落差別と闘ってくれる仲間や、理解してくれる人はいるのかな？」あき子さんが少し心配なのはこのことでした。



VTR「愛と自由のために」より

こんなとき、あき子さんは解放子ども会で高橋くら子のことを勉強したのです。くら子は明治40年、現在の小諸市の被差別部落に生まれました。同和教育がまだ行われていない時代ですから、被差別部落の生まれであることで、いじめや仲間はずしにあうことも多かったようですが、勝気なくらはそれには負けず、5年生の時以外は級長を務め、6年間皆勤、成績一番で通し、卒業証書を代表でもらったということでした。

成績が優秀で、家庭も経済的に豊かであったので、くら子は被差別部落の子どもとしては初めて高等女学校に進学しました。そして、学年とともに成績を上げていき、大正14年3月、成績2番で卒業、総代として卒業証書を受けました。けれどもこのことを喜んでくれる級友はいませんでした。当時の同級生はくら子の印象を「目立たない、地味な感じ」と語っており、また、担任の先生は「同級生でつき合っていた者はなかったのではないか。」と証言しています。

しかし、「地味で目立たない」女学生のくら子とは正反対の姿を、大正13年の長野県水平社創立大会に見いだすことができるのです。この会で唯一女性として演説し満場の喝采を浴びたのは、女学校5年、まだ17歳になったばかりの高橋くら子その人でした。これをきっかけとして、くら子は水平運動の女性闘士として活動を始め、やがて全国的な活躍をするようになります。その演説や論考には、部落解放の思想とともに、女性解放のきかけとなるような考えも盛り込まれていました。

「17歳のくら子がどうしてこんなことできたんだろうね。不思議じゃない？」解放子ども会の指導をしている同和教育推進教員の先生が聞いた時、あき子さんもまったく同感

でした。17歳といえば、自分とそんなに変わらないのです。しかも、女学校での彼女は「地味で目立たない生徒」だったというのに、どちらが本当の彼女なんだろう？

「差別に負けない気持ちが強かったんだよ。」

「自分に自信があったんだと思う。勉強もがんばっていたし。」

仲間の発言を聞きながら、「それだけで、こんなに強くなれるのかな？」という疑問があき子さんにはありました。

たまたま出席していた解放子ども会の先輩のお姉さんが言いました。

「自信があるということは大事だね。でも、それだけでは、大勢の人たちに何かを伝えていくということは難しいと思うな。くら子さんはこのころ何かに目覚めたんじゃないかな。」

「先生もそう思う。くら子は同じ村の出身で、長野県の水平運動の中心的な指導者だった朝倉重吉から、部落解放についての運動や思想を学ぶようになっていたんだ。水平社宣言を繰り返し読んだりしていたんだよ。」

先生はこの後、くら子の書いた論考の一部を紹介してくれました。「悲しみの中から愛と自由のため」という題の文章の一部です。

現在の私は何と幸福でしょう。人類愛にめざめた兄様や姉様方のご指導のもとに育まれている多幸の身です。そして水平運動の輝きの誇りに自覚のできた事を感謝せずにはられません。昨日までは自らを卑下していた愚かな女でした。しかし、今日の私は十分に胸一杯呼吸し得る身となりました。人間は礼賛すべき者尊敬すべき者である事を頑迷な社会に堂々と主張し得る強い女になりました。何者にも恐れぬ人間的信念に生きる身となりました。

くら子は「地味で目立たない」女学生の自分を「自ら卑下していた愚かな女」と言っているのでしょうか。あき子さんには、くら子が「愚かな女」とは思えません。差別に対して歯を食いしばり、勉強で自分を磨き続けたことは、すごいことだと思います。しかし、くら子を「幸福」にし、「強い女」になったと言わせている水平運動は、どんな輝きをその当時持っていたのか、あきさんは調べてみたくなりました。

【参考】 水平社の思想と高橋くら子

高橋くら子はその論考の中で、「自らを卑下していた愚かな女」であった自分が、水平社運動と出会うことで、「人間は礼賛すべき者、尊敬すべき者である事を頑迷な社会に堂々と主張し得る強い女」になったと述べています。くら子を変えた水平社とその思想とはどのようなものだったのでしょうか。

1、水平社創立まで

- ・1921年（大正10年）7月、早稲田大学の佐野学が、「部落差別を受けている者自身が、部落解消を要求していかなければならない」という内容の論文を発表。奈良県柏原の被差別部落の青年、阪本清一郎・西光万吉らは、これに深く共鳴し、佐野の指導を受けた。
- ・11月、阪本、西光らは、全国水平社創立事務所を奈良・柏原に設立。パンフレット『よき日の為に水平社創立趣意書』を全国向けに発送。
- ・1922年（大正11年）3月3日、京都市岡崎公会堂において、全国水平社創立大会が開かれる。

※学習例①→西光万吉とはどのような人か調べてみよう。

2、時代背景

- ・1922年4月には日本農民組合が成立し、7月にはひそかに日本共産党が結成された。このような動きが出てくる背景には、米騒動に見られるような生活難や社会不安が国民の間に広まっていたことが考えられる。

※学習例②→右ページの年表を完成させ、第1次大戦前後の日本の様子を調べよう

3、水平社の思想

- ・「水平」は、「人間が作った尺度ではない、絶対に差のできないもの」である。そこには、真の平等を願う思いがこめられている。
- ・「水平社宣言」では、差別を受けている人たちの団結を呼びかけ、自分たちの立場を卑下することなく、むしろ誇りとして、人間性を尊敬することを通して解放運動を進めていこうとうたわれている。

※学習例③→高橋くら子にとって、水平社運動が持っていた輝きとは何だったのか水平社宣言から読み解いてみよう。

【年表】 水平社の思想とくら子 歴史年表を完成させよう

西暦	年	出来事	くら子の生涯
1935	35	・大江磯吉 病死。(35歳)	
1940	40		
1943	3		
1944	4		
1945	5		
1946	6	治39 島崎藤村が小説 () 出版。	北佐久郡北大井村加増 (現小諸市) に生まれる。
1947	7	40	
1948	8		
1949	9		
1950	10		
1951	1		
1952	2		
1953	3		
1954	4	大3 　・第一次世界大戦が起きる。	北佐久郡北大井小学校 (現小諸東小学校) 入学。
1955	5		
1956	6		
1957	7	正6 　・消費拡大と買い占めにより米価急騰。	
1958	8	7 　・富山県魚津市で () が起きる。	
1959	9		
1960	10		
1961	1		小諸実科高等女学校に被差別部落の子どもとしては初めて入学
1962	2	11 　・全国水平社が () 岡崎公会堂で創立。	
1963	3		
1964	4	13	女学校5年。長野県水平社創立大会少女弁士 (17歳) 水平運動弁士として各地で熱弁をふるう。
1965	5	14	
1966	6		
1967	7	2	
1968	8	3	全国水平社大会 (広島) で北原泰作の家族救援を提案 上京して川島松蔵と結婚。(21歳)
1969	9	昭	
1970	10		
1971	1	6 　・ () 事変が起きる。	
1972	2		
1973	3		
1974	4		
1975	5		
1976	6	和	
1977	7	12 　・ () 戦争が起きる。	松蔵事故死。病身のくら子は3人の子どもを連れて帰郷。
1978	8	13	病死 (31歳)
1979	9		
1980	10		
1981	1	16 　・太平洋戦争が起きる。	
1982	2	17 　・全国水平社、法的に消滅。	
1983	3		
1984	4		
1985	5	20 　・広島、長崎に原爆投下される。 　・日本、無条件降伏する。	

◇教材の解説

教材「高橋くら子との出会い」は創作ですが、解放子ども会に学ぶ中学3年生の多くが、それまでの解放子ども会員としての活動を、卒業後どのようにつなげていくかということに思いを働かせることは事実です。しかし、高校進学と同時に解放子ども会の活動や学生の会、青年部の活動とのつながりが弱まってしまう人も多いようです。

高橋くら子は、高等学校においては、きわめて地味でめだたぬ存在であったようです。しかし水平社の運動と出会い、人間の尊厳に目覚めて、自己の持てる資質を開花させることができた高橋くら子の生き方は、人生の価値について改めて私たちに考えさせずにはおきません。自分の人生の価値を見出す途上の若い人たちにとって、参考とするところが多いのではないのでしょうか。

◇発展資料

○同和教育ビデオ「愛と自由のために～くら子のメッセージ～」(1999年長野県同和教育推進協議会)

○「高橋くら子伝」小諸市中学校同和教育資料

○高橋くら子の「論考」

- ・「悲しみの中から愛と自由のため」1924(大正13)年7月1日発行関東水平社連盟内自由社機関誌『自由』第1巻第1号婦人欄
- ・「姉妹よ! 団結せよ」1924(大正13)年9月1日発行『自由』第1巻第2号婦人欄
- ・「婦人の自覚」1924(大正13)年12月1日発行『自由』第1巻第3号婦人欄
- ・「正義と人道の戦い」1925(大正14)年9月1日発行水平社自由青年連盟準全国機関誌『自由新聞』第4号婦人欄

○ワークショップ「わたし出会い発見・価値観」「わたし出会い発見2・私たちバージョン『水平社宣言』」大阪府同和教育研究協議会編 1998年

○「部落史・部落問題学習のすすめかた」藤里晃著 解放出版社

- ・西光万吉について (P300)
- ・「水平社宣言釈義」栗須七郎 (P305)

◇参考文献

- ・高橋くら子—長野県水平社創立期に活躍したアナ系女性闘士 柴田道子著
- ・高橋くら子と長野県水平運動の創立期—小諸高女生時代を中心に—東栄蔵著 (「人権感覚を深めるために」東栄蔵 前出「伊藤千代子の死」同著、1979 未来社所収)
- ・「近代部落史の研究」青木孝寿 部落問題研究所 1982年)